

顕在的・潜在的自尊感情の不一致と他者軽視の関連

—不一致の「大きさ」と「方向」も含めて—

稲垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

澤田 匡人 [宇都宮大学教育学部]

The relationship between explicit/implicit self-esteem discrepancy and undervaluing others

INAGAKI Tsutomu · SAWADA Masato

キーワード：顕在的自尊感情、潜在的自尊感情、不一致、他者軽視、Implicit Association Test

問題と目的

近年、潜在連合テスト (Implicit Association Test ; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT とする) をはじめとする種々の潜在的測度の発展により、潜在的なパーソナリティや態度、感情の測定に焦点が当てられている。IAT とは、画面上に連続して現れる単語の分類課題を通して、特定の概念を測定するものである。とりわけ、IAT を用いて潜在的自尊感情 (implicit self-esteem; 以下 ISE とする) を測定している研究は、国内外を問わず数多い (e.g., 藤井・澤海・相川, 2014; Fujii & Uehara, 2016; Greenwald & Farnham, 2000; 市川・望月, 2015; 原島・小口, 2007; Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; Lee & Fujii, 2016; 村上, 2014; 小塩・西野・速水, 2009)。

一般的に IAT を用いて ISE を測定する際は、カテゴリー次元 (自己-他者) と属性次元 (快い-不快な) に関連する刺激語 (e.g., 自分, 友だち, 嬉しい, 醜いなど) について、対応するキー押しによって、単語のグループ分けを行う。課題の中で、カテゴリー次元と属性次元が組み合わせられた試行を 2 種類 (そのうち 1 種類は組み合わせが逆になったもの) 行い、反応時間が早い組み合わせ課題の方が、対になっているカテゴリーと属性の連合が強いと考えられる。IAT は個人差の測定に十分に敏感で、信頼性・妥当性にも優れるとされる (潮村, 2008, 2016)。

ところで、質問紙などで測定する顕在的な自尊感情 (explicit self-esteem; 以下 ESE とする) に比して、ISE はどのような働きがあるのだろうか。たとえば、Greenwald & Farnham (2000) は、困難な課題に直面した際にも、ISE が高ければ動機づけが低下しにくいという結果を報告し、ISE がバッファとして機能することを示唆している。この研究と関連して、Fujii, Sawaumi, & Aikawa (2014) は、困難な英語の問題に取り組んだ参加者の中でも、ISE が高い者は無能感を感じにくいことを示している。また、藤井 (2016) は韓国女子大学生を対象に、氏名の選好 (Gebauer, Riketta, Broemer, & Maio, 2008) を指標として測定した ISE が、期末試験後に生じる抑うつ感情を低減していることを示し、西洋のみならず東アジア圏においても、ISE がバッファとして機能することを示している。ただし、小塩他 (2009) は、他者を見下すことによって有能さを知覚しようとする「仮想的な」有能感と ISE が正の相関を示すことを報告している。このように、ISE を用いた研究はポジティブな結果のみならず、ネガティブな結果も報告されている。

ESE との交互作用 近年は、ISE と ESE との組み合わせによる効果を検討した研究も増加している。たとえば

Jordan et al. (2003) は、高いESEを持つ者に2つのタイプを仮定し、確信的な自己のポジティブな見方をもつ“secure high SE (安定的高 SE)”と、脅威に対し脆弱なポジティブさをもつ“defensive high SE (防衛的高 SE)”の存在を指摘した。ESE と ISE の両者に不一致がある場合、その不一致を解消しようとして防衛的反応が生じるという。実際に Jordan et al. (2003) は自己愛や内集団ひいき、認知的不協和の解消を従属変数とし、ESE・ISE の不一致に関して検討した。その結果、ESE が高く ISE が低い者は、自己愛や内集団ひいきが高く、認知的不協和の解消を図っていた。本邦では原島・小口 (2007) や藤井 (2014) が、内集団ひいきを従属変数として同様の実験を行い、Jordan et al. (2003) の結果を追認している。また藤井 (2014) は、高 ESE 群の中でも、低 ISE 群の方が高 ISE 群よりも抑うつ・不安が高いことも見出している。

不一致の「方向性」 このように、ESE と ISE の不一致とネガティブな変数との関連を示す研究が蓄積されているが、不一致を扱った研究における ESE・ISE の交互作用はいずれも高 ESE 群において得られることが多い。それでは、低 ESE 群については、ISE と ESE の不一致は問題にならないのだろうか。

原島・小口 (2007) は、低 ESE 群における ESE・ISE の不一致については先行研究においてあまり言及がなされていないことを指摘し、詳細な検討が必要であると述べている。この点に関して、Schroder-Abé, Rudolph, Wiesner, & Schütz (2007) は、高 ESE 者に限らず ESE と ISE の不一致 (i.e., 高 ESE かつ低 ISE, または低 ESE かつ高 ISE) を対象に研究を行った。その結果、ESE と ISE に不一致を示す参加者は、自身の印象に対するネガティブなフィードバックを読む時間が短く、自身の脅威となる情報を避ける防衛的反応を行っていた。小塩他 (2009) は、前述の仮想的な有能感を測定するために用いる他者軽視傾向尺度の得点について、低 ESE 群において高 ISE 群は低 ISE 群より高く、また高 ISE 群において低 ESE は高 ESE 群より高いという交互作用を見出している。こうした結果は Schroder-Abé et al. (2007) の主張と一致しており、本邦において低 ESE 群の中で ISE との不一致を示した研究は他にみられていないことから、小塩他 (2009) の知見は ESE と ISE の不一致を扱う研究に活路を拓くものである。

加えて Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers (2013) は、ISE が高い場合、ESE との不一致が大きいほど (i.e., ESE がより低いほど) 抑うつ傾向や自殺念慮、そして孤独感が高いという結果を報告している。同様の結果は、日本人や韓国人の大学生を対象にした藤井 (2015a, b) でも得られており、必ずしも西洋でのみ生起する現象でないことが示されている。そして、市川・望月 (2015) では、ISE が高い場合、ESE との不一致が大きいほど、境界性パーソナリティ障害傾向・回避性パーソナリティ障害傾向が高いことを示しており、ISE と ESE の不一致とネガティブな指標との関連を示す研究が蓄積されてきている。これらの研究で用いられている分析方法で注目すべきは、Jordan et al. (2003) の方法とは異なり、ESE・ISE の「不一致の大きさ」および「不一致の方向」を独立変数としている点である。すなわち、Jordan et al. (2003) にもとづく分析方法では個人の中で ESE・ISE の不一致の大きさや、ESE・ISE のどちらが優位であるのかという点は検討できないため、このような分析方法が提案されている。

このように、高 ESE・低 ISE および低 ESE・高 ISE という2種類の ESE・ISE の不一致と、心理的な不健康さや防衛的な行動との関連を示した研究が蓄積されつつある。特に ESE・ISE の不一致の大きさと方向に着目した研究はまだ少なく、この観点からの分析を行うことで、今後の研究資料となることが期待できる。

先行研究の課題 小塩他 (2009) の報告は低 ESE と高 ISE という不一致がもたらすネガティブな結果を示す重要な研究であるが、一つの課題を残しているといえる。それは、IAT に用いた刺激語である。本邦で用いられる自尊感情 IAT に使用される刺激語は、英語版 IAT の刺激語 (I, my, me など) を直訳し「私は」、「私の」、「私を」などが

使用されることが多い。こういった文字の特徴が類似している、あるいは共通の文字を含む刺激語を用いた場合、参加者が特定の語（ここでは「私」）が含まれているか否かに注目し、課題を単純化する可能性が指摘されている（Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007）。小塩他（2009）で用いられた刺激語も、「自分」カテゴリーの刺激語には「自分は」、「自分の」、「私は」、「私の」、「私と」が使用されており、特に「他人」カテゴリーの刺激語には「他者」、「他者の」、「他人は」、「他人の」、「他人と」というように、すべて「他」という文字が含まれている。したがって、Lane et al.（2007）が指摘する刺激語の問題が存在する可能性を否定できない。小塩他（2009）も、考察において「今回の検討で得られた結果は、あくまでも今回使用した刺激語によって得られたという点にも留意する必要があるだろう（p.258）」と述べており、他の刺激語を用いた検討も必要であるとしている。

本研究の目的 上記の課題を鑑みて、本研究では「わたくし」、「自分」などの刺激語を用いた藤井・上淵（2010）の自尊感情 IAT の刺激語を使用して追試を行う。この IAT を用いた研究はいくつか行われており、たとえば Fujii et al.（2014）は、Greenwald & Farnham（2000）と近似したパラダイムで実験を行い、類似した結果を報告している。具体的には、参加者に対して困難な課題を実施した後に測定したネガティブ感情（無能感）に対し、IAT で測定した ISE が負の影響を示していた。このことは、Greenwald & Farnham（2000）が示した、ISE のバッファとしての機能を支持するものである。また、この自尊感情 IAT の刺激語が参加者にとって混乱なく分類可能であるか否かを確認するため、藤井他（2014）は SD 法を用いた調査を行っている。その結果、刺激語はすべて予想された方向に評定されており、平均値の理論的中央値からの差も有意であった。ゆえに、この自尊感情 IAT の刺激語は一定の妥当性を有すると考えられる。

以上より、本研究では、小塩他（2009）で用いられた自尊感情 IAT の刺激語を修正した上で追試を行い、同様の結果のパターンが得られるかを確認することで、この知見が頑健であるか否かを検討するとともに、ESE と ISE の不一致の大きさと方向という観点も踏まえて、他者軽視傾向への影響を併せて検討する。

方 法

参加者 大学生および大学院生 92 名（男性 35 名、女性 46 名。平均年齢 22.41 ± 3.93 歳）が実験に参加した。

材料 本研究では、以下の尺度を用いた。

自尊感情尺度 参加者の ESE を測定するために、Rosenberg（1965）の尺度を翻訳した山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度を用いた。「自分に対して肯定的である」、「物事を人並みには、うまくやれる」などの 10 項目から構成される。6 件法（1: 全くそう思わない - 6: 非常にそう思う）で回答を求めた。

他者軽視尺度 参加者の他者軽視を測定するために、Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan（2004）による他者軽視尺度を使用した。「自分の周りには気のきかない人が多い」、「世の中には、常識のない人が多すぎる」などの 11 項目から構成される。6 件法（1: 全くそう思わない - 6: 非常にそう思う）で回答を求めた。

自尊感情 IAT 参加者の ISE を測定するために、藤井・上淵（2010）において使用された自尊感情 IAT を用いた。カテゴリー語は「自己」および「他者」を使用し、属性語は「快い」および「不快な」を使用した。自尊感情 IAT のカテゴリー語、属性語、および刺激語は Table1 に示す通りである。

Table1 自尊感情 IAT に用いたカテゴリー語, 属性語および刺激語

自己	他者	快い	不快な
自分	友人	うれしい	汚い
自身	知人	幸せな	残忍な
私	他人	気持ちいい	気持ち悪い
我々	知り合い	元気	苦痛
わたくし	ともだち	素晴らしい	落ち込む

手続き 本研究では一部の参加者に対しては実験室において、それ以外の参加者に対してはインターネットを用いて実験用プログラムにアクセス可能な URL を案内して実験を行った。いずれの場合も、参加者に対し、実験への参加は任意であり、参加しないことによる不利益は生じないこと、結果を公表する際は個人が特定できないように統計的処理をした上で発表することを口頭もしくは電子メールの文章において説明した。また、実験中はいつでも実験を終了できることを併せて教示した上で、実験への参加を求めた。同意した参加者に対し、上述の各尺度への回答を求めた。各尺度の測定順序は参加者ごとにカウンターバランスをとった。これらの尺度への回答の後に追加の課題を実施しているが、本稿の目的とは関連がないため特に報告しない。実施に要した時間は、他の課題を含めて 25 分程度であった。実験終了後、参加者には謝礼として図書カードを渡した。

結果

尺度の得点化 各尺度について、自尊感情尺度は逆転項目を処理して合算し、項目数で除した得点を求めた。他者軽視尺度は逆転項目を含まないため、合算し項目数で除した得点を求めた。自尊感情 IAT は *D* 得点 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を求めた。いずれの尺度も、得点が高いほど当該尺度名の傾向が高いことを示す。以降は自尊感情尺度、他者軽視尺度、自尊感情 IAT の各得点を、それぞれ ESE 得点、他者軽視得点、ISE 得点と定義する。各尺度の記述統計量および相関係数を Table2 に示す。

Table2 各変数間の相関係数および記述統計量

	2	3	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
1ESE	.07	-.02	3.55	0.78	.88
2ISE	—	.20	0.73	0.37	—
3 他者軽視		—	3.07	0.68	.85

† $p<.06$

各尺度の相関係数 ESE 得点は、ISE 得点および他者軽視得点との相関係数はともに有意ではなかった。ISE 得点は、他者軽視得点との正の相関係数が有意傾向であった ($r = .20, p < .06$)。

ESE・ISEの不一致の検討 他者軽視得点を従属変数、ESE・ISE得点および両者の交互作用を独立変数とした階層的重回帰分析を行った (Figure1)。Step1でESE・ISEの各得点を投入したところ、ISE得点の主効果が有意傾向であり ($b^* = .21, SE = 0.19, p < .06$)、ISE得点が高いほど他者軽視得点が高かった。さらにStep2で投入したESE・ISE得点の交互作用項の影響が有意であり ($b^* = -.23, SE = 0.26, p = .04$)、従属変数の説明率が上昇した ($\Delta R^2 = .047$)。そこで単純傾斜の検定を行ったところ、ESE得点が高い場合 ($-1SD$)、ISE得点が高いほど他者軽視得点が高かった ($b = 0.65, t = 2.88, p = .01$)、ISE得点が高い場合 ($+1SD$)、ESE得点が高いほど他者軽視得点が高い傾向があった ($b = -0.23, t = -1.77, p = .08$)。

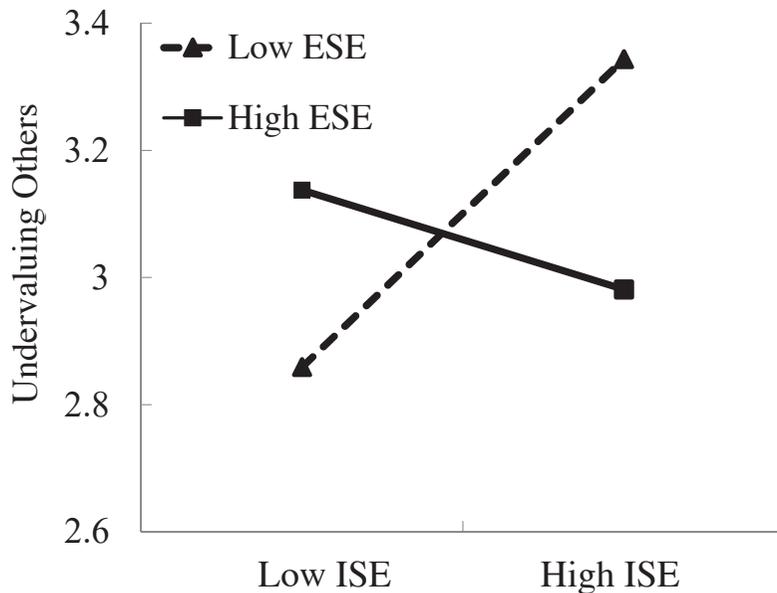


Figure1 ESE得点とISE得点による他者軽視得点の予測

ESE・ISEの不一致の大きさと不一致の方向の影響 Creemers et al. (2013)と同様に、ESEとISEの得点を標準化して差を求め、その絶対値を算出した。次にESEが優位であれば0、ISEが優位であれば1として、不一致の方向のダミー変数を作成した。続いて他者軽視尺度の得点を従属変数として、step1でESE・ISEの不一致の大きさと方向を投入し、step2で両者の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。その結果、step1で投入した不一致の大きさの影響が有意であり ($b^* = .23, SE = 0.09, p = .03$)、ESEとISEの不一致が大きいくほど他者軽視傾向が高かった。ただし、step2で投入した不一致の大きさと方向の交互作用項の影響は有意ではなかった ($b^* = .07, ns$)。

考 察

本研究では小塩他 (2009)におけるIATの刺激語の問題点を修正した上で、同様の結果が再現されるか否かを検討した。また、Creemers et al. (2013)と同様に、ESEとISEの不一致の大きさと方向という観点からの分析を行った。

順に結果について考察する。

各尺度の相関係数 ESE 得点と ISE 得点の相関係数は有意ではなく、ISE 得点と他者軽視得点のみ弱い正の相関係数が有意であった。これらの点はいずれも小塩他 (2009) の結果と同様であり、調査対象や IAT の刺激語を変えた場合でも、各尺度の相関関係は先行研究と一致した結果が得られたといえる。

ESE・ISE の不一致 階層的重回帰分析の結果、ESE が低い場合、ISE が高いほど他者軽視が有意に高く、小塩他 (2009) と同様の ESE・ISE の不一致の影響が観察された。また、ISE が高い場合、ESE が低いほど他者軽視が有意傾向ではあるが高く、この点も小塩 (2009) と一致するものである。したがって、先行研究で課題として残されていた点を克服した上でも、同様の結果が再現されたといえる。

Briñol, Petty, & Wheeler (2006: 実験 4) は、ESE と ISE の不一致 (高 ESE かつ低 ISE、または低 ESE かつ高 ISE) が大きいほど、提示された説得的メッセージを綿密に読むことを示した。Briñol et al. (2006) は、ESE・ISE が一致していない者は、認知的不協和によってネガティブ感情が生じ、そのネガティブ感情を低減するために、提示されたメッセージを綿密に読むと解釈している。Briñol et al. (2006) は、ESE と ISE の不一致がネガティブ感情を生じさせることを直接示してはいないが、藤井 (2014) は、高 ESE 群における低 ISE 群は、高 ISE 群と比して抑うつ・不安というネガティブな感情が高いことを示している。また、この研究において、低 ESE 群においては、高 ISE 群と低 ISE 群の間で抑うつ・不安に有意な差はみられていないが、高 ISE 群の方が抑うつ・不安は高い傾向にあり、不一致がネガティブ感情を生じさせる可能性を示すものである。小塩他 (2009) や本研究の結果は、この可能性を支持するものではあるが、高 ESE 群においては ISE との不一致の影響はみられていない。すなわち、ネガティブな心理的変数であっても ESE と ISE の不一致による影響が必ずしもみられるというわけではないことが示された。

小塩他 (2009) も指摘しているが、Jordan, Whitfield, & Zeigler-Hill (2007) は、ESE が低く ISE が高い者は、自身の学業での成功の後にはよりポジティブな自己像を持ちやすい一方で、失敗の後ではよりネガティブな自己像を持ちやすいことから、自己に関連する出来事に敏感であるとされる。この点を本研究の結果に適用して解釈すると、ESE が低く、他者への脅威を感じながらも ISE が高い者は、他者を見下すという下方比較を行うことによって ESE を高めようとしている可能性がある。または、高 ESE 群の中で不一致を起こしている場合と同様に、ESE と ISE の不一致によって生じる認知的不協和を解消するために、防衛的行動として他者軽視を行っているのかもしれない。

ESE・ISE の不一致の大きさと不一致の方向の影響 ESE と ISE の不一致の大きさを独立変数とした階層的重回帰分析の結果、不一致の大きさが他者軽視傾向に正の影響を与えていた。すなわち、ESE と ISE の不一致が大きいほど、他者軽視傾向が高いといえる。このことは、ESE もしくは ISE のいずれか一方のみを高めるような介入は効果的であるとは言えず、両者を同程度の高さに保つことが重要であることを示している。ESE を高める方法については従前から多くの検討がなされているが、潜在的側面への変容をもたらす研究は緒に就いて間もないように思われる。近年では評価条件づけと呼ばれる手法を用いて、図形への潜在的態度 (尾崎, 2006) や潜在的シャイネス (藤井・澤海・相川・中野, 2016) の変容可能性を探る試みが行われている。こうした手法を援用することで、ISE の変容可能性を検討するとともに、その結果として他者軽視傾向にも影響が見られるか否かを検討していくことも、一考に値すると思われる。

本研究の制限と展望 本研究は小塩他（2009）で指摘されていた課題を改善し、同様の結果が得られるか否かを確認することを目的として実施したものである。したがって、低ESE群におけるISEとの不一致が他者軽視にもたらす影響過程については本研究のデータでは明らかにできず、この点については今後の研究が必要である。

こうした制限はあるものの、本研究では先行研究と同様の結果が得られた。先行研究の問題点を改善した上で結果の再現は、知見の頑健さの証左といえよう。原島・小口（2007）が指摘するように、ESEが低い群におけるISEとの不一致については研究例が少なく、明らかになっていない部分が多い。今後は他の従属変数を用いたり、実験的操作を加えたりするなどを通じて、ESEとISEの不一致がもたらすものについての更なる検討が求められる。

引用文献

- Briñol, P., Petty, R. E., & Wheeler, S. (2006). Discrepancies between explicit and implicit self-concepts: Consequences for information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, *91*, 154–170.
- Creemers, D. H., Scholte, R. H., Engels, R. C., Prinsteijn, M. J., & Wiers, R. W. (2013). Damaged self-esteem is associated with internalizing problems. *Frontiers in Psychology*, *4*, 152.
- 藤井 勉 (2016). 大学生の潜在的・顕在的自尊心が試験後の感情に及ぼす影響——特に潜在的自尊心のバッファリング効果に注目して—— *人文科学研究*, *34*, 449–470.
- 藤井 勉 (2015a). ネガティブ感情に及ぼす顕在的・潜在的自尊感情の不一致の影響 ——不一致の「大きさ」と「方向」の観点から—— *日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集*, 21.
- 藤井 勉 (2015b). 韓国人大学生における顕在的・潜在的自尊感情の不一致と心理的適応の関連——不一致の「大きさ」と「方向」に注目して—— *日本感情心理学会第23回大会発表論文集*, OS09.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 *心理学研究*, *85*, 93–99.
- 藤井 勉・澤田匡人 (2014). 自尊感情とシャードンフロイデ——潜在連合テストを用いた関連性の検討—— *感情心理学研究*, *21*, 114–123.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2014, February). Buffering effects of implicit self-esteem after failure experience: Investigation among Japanese people. *Poster presented at the 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology* (Texas, USA), D270.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2014). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の3下位尺度との関連から—— *感情心理学研究*, *21*, 162–168.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013). Test-retest reliability and criterion-related validity of the implicit association test for measuring shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, *E96-A*, 1768–1774.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充・中野友香子 (2016). 評価条件づけを用いた顕在的・潜在的シャイネスの変容可能性の検討 *教育テスト研究センター年報*, *1*, 31–33.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定を試み *東京学芸大紀要総合教育科学系 I*, *61*, 113–120.

- Fujii, T., & Uehara, Y. (2016, July). "Name-Liking" as an Implicit Measure of Global Self-Esteem: Relationship Between Name-Liking and Implicit Association Test Among Japanese People. *Poster presented at the 6th Asian Congress of Health Psychology* (Yokohama, Japan) , L-06.
- Gebauer, J. E., Riketta, M., Broemer, P., & Maio, G. R. (2008). "How much do you like your name?" An implicit measure of global self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, *44*, 1346–1354.
- Greenwald, A.G., & Farnham, S.D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 1022–1038.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1464–1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 197–216.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, *5*, 127–135.
- 原島雅之・小口孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, *47*, 69–77.
- 市川玲子・望月 聡 (2015). パーソナリティ障害と顕在的・潜在的自尊感情間の乖離との関連 心理学研究, *86*, 434–444.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 969–978.
- Jordan, C. H., Whitfield, M., & Zeigler-Hill, V. (2007). Intuition and the correspondence between implicit and explicit self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, *93*, 1067–1079.
- Lee, J., & Fujii, T. (2016, August). Implicit self-esteem in Korea: Using various implicit measures. *Poster presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology* (Nagoya, Japan) , No. 28916.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and using the Implicit Association Test: IV: What we know (so far) about the method. In B. Wittenbrink & N. Schwarz. (Eds.) , *Implicit measures of attitudes* (pp. 59–102). New York, Guilford Press.
- 村上史朗 (2014). 対人的脅威が潜在的自尊心の補償的高揚に及ぼす効果 奈良大学紀要, *42*, 181–190.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, *17*, 250–260.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Schröder-Abé, M., Rudolph, A., Wiesner, A. & Schütz, A. (2007). Self-esteem discrepancies and defensive reactions to social feedback. *International Journal of Psychology*, *42*, 174–183.
- 潮村公弘 (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性 下斗米 淳 (編) 自己心理学6 社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp.48–62.
- 潮村公弘 (2016). 自分の中の隠された心 セレクション社会心理学 29 サイエンス社

尾崎由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, 45, 98-110.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

本研究は、藤井・澤田 (2014) で得られたデータの一部を、新たな視点から再解析したものである。参加者 92 名のうち 8 名は実験室実験を行った一方、残りの 84 名は Web 上で実験を行った。実験室で実験を行った条件と、Web 上で実験を行った参加者との間で、自尊感情尺度、他者軽視尺度、自尊感情 IAT の各得点に有意な差は見られなかった ($t_s(90) = 0.25 - 1.13, p_s > .26$)。したがって、本研究で収集した各変数について、実施条件による差はないと考えられる。